

Karun Koh (6,977m) 北西壁初登攀

中 島 健 郎 (石井スポーツ)

「頂上稜線が見えたね」

ナニ？頂上稜線？？

平出のいう言葉がすぐに理解できなかった。

あたりはガスに包まれ真っ白。もはや自分がどこを登っているのかすら分からない。



平出がリードして北西壁に向かってゆく。

出会い

カールンコー。その山の名前を聞いたのは2021年の秋だった。

その冬に平出和也と三戸呂拓也がパキスタン遠征で挑む山の一つとしてこのピークの名前があった。僕自身聞いたことも見たこともない山だったが、写真を見る限りでは、ピラミダルなカッコイイ山であった。何より、ここを登れと言わんばかりの美しいダイレクトなラインが未踏で残されていることに驚いた。この山は1984年にオーストリア隊が南西稜から登頂したのみで、それ以降の記録は途絶えていた。山自体はシムシャル川以北にある山ではもっとも高く、フンザ村の北西50kmに位置している。カラコルムハイウェイからそれほど遠い距離ではないもの

の、北面へのアプローチは狭いゴルジュの先の氷河源頭にあるため、この山の北西壁を見た人はほとんどいないという。地図を見ただけではこの魅力的な壁が残っていることに気づかないのだろう。だが、そこに目をつけたのが、フンザを第二の故郷と呼ぶ平出だった。そして、12月初め、平出と三戸呂の二人は新型コロナウイルス感染拡大が落ち着き始めたいつときを見計らってパキスタンに向かう。二人はカールンコーの横にそびえる、のちにサミサールと命名される6,032mの未踏峰への登頂後にカールンコーに挑戦する二座の登山計画があった。12月も半ばを過ぎた頃、利尻島にいた僕のところに現地から連絡が入った。未踏峰への登頂後、平出が両手足に凍傷を負ったためにベースキャンプからヘリで病院へ搬送されたという。

「一体どうしたんだ...」と思ったが、ベースキャンプでマイナス20℃、山頂では体感温度マイナス40℃にまで下がったという、冬のパキスタンである。平出はむかし、凍傷で足の指を切断している。でもこれが原因ではないだろう。新型コロナウイルスの影響で思うような活動が二年以上も中断されていた。自分でルートを切り開き、以前の調子をつかんで次に続けたい。そんな想いでつい無理をしてしまったのだろうか。

病院のベッドの上で過ごす年越しはさぞかし悔しいものだと思いますが、その時は早い回復を案じていたが、さすがに翌年夏（2022年夏）に予定していた平出との遠征登山は難しいのかもしれない、と冷静に判断するしかなかった。

平出と三戸呂は年が明けた1月に帰国し、平出は2月に手術をして少し足の指先を切断。その後3月に入り、トレーニングを再開したと連絡が入った。なんという回復力だ。何よりも気持ちが既に山へ向かっていることに僕は驚いていた。夏以降には怪我は回復するだろうと本人が予言した通り、僕たちは2023年8月下旬にパキスタン行きの飛行機に乗っていた。コロナウイルス感染拡大以前から計画していた山ではなく、平出が凍傷を負ったため途中中断となってしまった、「カールンコー」に戻るためだ。僕は誘われて賛同した身だが、あの綺麗なラインヘトライできるチャンスがある、という想いで純粋にワクワクしていた。



パキスタンに向かう空港にて。僕(左)と平出。

日本ではコロナウイルスで未だマスク生活を送っているというのに、イスラマバードに着くなりマスクをしている人を見つけることが難しい。この夏、K2は過去最多の登山者を迎えた。コロナウイルスの影響で登山ができなかった人々が一斉に押し寄せたのだ。ネパールのシェルパがルート工作をして、エベレストと同様に危険な箇所全てに固定ロープを張れば多くの登山者を迎えることができる。

“非情の山”と呼ばれた世界第二の高峰は、格好の商業登山の場と変貌しつつあった。そんなこととはつゆ知らず、僕たちは夏のシーズンの終わりにやっ

て来たので、山は静かなものだ。そもそも行こうとしているエリアは登山者が入ることは滅多になく、冬にハンターが入る程度。いつもと変わらない静かな登山を楽しめそうだ。

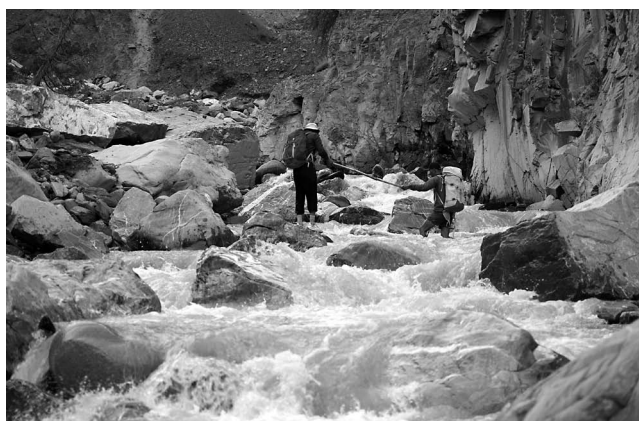
8月29日、イスラマバードから空路でギルギットに入る予定が、悪天のため陸路に変更。初日はバブサル峠経由でチラスまでしか行けなかったが、翌日にはギルギッドでブリーフィングをし、フンザに到着した。パキスタンではモンスーン期の豪雨の影響で国土の3分の1が水没したというニュースが流れ、日本からは心配の連絡が入った。しかし、水没したのは海拔が0mに近い南の地域で、北部の山岳地域はそれほどダメージを受けていなかった。もちろん土砂崩れや、建物が流されたりしている箇所はあったが、例年に比べて被害は大きかったものの交通に影響がでる程のことはなかった。僕にとってのフンザは2017年のシスパーレ(7,611m)遠征以来の訪問でベースキャンプに到着するまでの高所順化は、シスパーレがよく見えるパサー対岸の丘に1泊2日で出かけた。アブデガル(4,100m)という名の放牧地であったが、美しい朝焼けに照らされたシスパーレを見て、ようやく僕も戻って来たのだ、という実感が湧いていた。

入山

9月3日、中国との国境があるクンジュラブ峠手前の最後の街スストでポーターを集め、一台のワゴン車でカラコルムハイウェイを北上。カールンコー北面のアプローチとなるソクタラバット谷の入り口で下車し、トレッキングを開始する。谷の入り口は狭いゴルジュ地形になっていて、こんな谷にわざわざ入るのは街で聞いていた通りハンターぐらいだろうと、納得した。このエリアは野生のブルーシープやアイベックスの狩猟する場所として知られており、国が管理している。冬には国内外からハンターを迎

3. 海外登山記録

えるが、夏に入る人はほぼいない。9月に入って少し水量は減っているといえども、谷に入っても橋はないので、渡渉を繰り返すことになる。初めは丁寧に靴とズボンを脱いで腿ぐらいまでの深い水に浸っていたが、何度も繰り返すことにキリがなくなり、着の身着のまま9回の渡渉を繰り返した。



モンスーンは明けているが、下流部分の水量はまだ多い。

入山してから3日目のベースキャンプ入りの日によくカールンコーが僕たちの目の前に姿を現した。標高6,000m台と思って甘く考えていたが、このエリアではもっとも高い独立峰だ。想像以上に大きな山、そしてそこには大きな壁があった。当初から考えられていたダイレクトラインの核心部分は細い溝になっており、岩に隠れて見えない。そこだけではなく全体的に想像に容易くない姿を見せていた。

無機質なモレーンの中に紅葉した草が少し生えているだけの氷河末端左岸の台地にベースキャンプを構えた。小さな植物が生えているだけでも僕たち以外の生命をそばで感じられ、滞在場所としては嬉しいものだった。ベースキャンプ設営後、ポーターやガイドと別れを告げ僕たち2人きりになった。そう、今回はベースを守ってくれるガイドやコックさんが不在なので、いきなりの自炊生活も始まる。「やはり元気づけには肉だな」ということで鶏肉を準備していたのだが、キャラバン2日目には腐ってしまいそ



開放感が半端ないベースキャンプだ。



色映えるキッチンテントが花を添える。



下ごしらえは平出、もっぱら僕は鍋振り担当。



滞在中の食事は全て美味しい。

うという理由で早々に調理して食べてしまった。もはや新鮮なタンパク源は卵だけになってしまい、登山活動に繋がるベースキャンプでの食事内容が心配になっていた。

パキスタンに着いてから天候はずっと良い。ベースキャンプ到着後の翌日には2日間の行程で偵察と順応をしに山へ向かうことにした。先ずベースキャンプの近場で標高が稼げる谷の左岸側の展望地を目指した。5,630mまで一気に標高を上げたので、相変わらず高所に弱い僕は悲惨な一晚を明かす。次はルート偵察と6,000m台の高所順応だ。氷河を詰め、カールンコーが初登頂された北西稜の6,000mまで登り一泊。当初の計画では北西壁を登り、北西稜を下降しようと考えていた。北西稜は雪崩の痕跡や氷壁トラバースなどを勘案した結果、下降路にしてはリスクが高いと判断。僕たちは北西壁の同ルート下降へと



中央にカールンコー、左にサミサル。



偵察1日目のテントの中でまだ元気な僕(右)。

変更することにする。そして、近づけば見えるだろうと予測していた隠された核心部は残念ながらこの場からでもいまひとつよく見えなかったが、なんとなく薄い氷と岩が繋がっていきそうなので、どうにか乗り越えられる感触は得た。

停滞

天候に恵まれたお陰でベースキャンプに入ってから5日間でアタックに向けての準備がほぼ整ったのだが、僕は高所に弱い。だからもう少し順化をしたいと思っていた矢先、ついに悪天周期がやって来てしまった。翌日からベースキャンプでは雨が降り、朝から一向に気温も上がらず冷たい雨が降り続いた。一日中テントに籠っているのも、やることと言ったら料理ぐらいだった。つけ麺やチャパティ作りなど忙しい時には絶対やらないような料理に挑戦してみる。その後もスッキリしない天候が続き、気温も徐々に下がって来た。氷河が溶けて流れていた川には氷が張る。季節は明らかに冬に近づいている。停滞して一週間目の夜中、暑くなって目を覚ます。川の音が消えて随分と静かだと思ったらテントが雪にパッキングされていたのだ。ベースキャンプでも雪が積もり始め、あたり一面銀世界へと変貌した。その翌日は待ちに待った快晴となったが、降雪直後は無理をせず、雪が落ち着くのを待つことにした。



静けさがどこまでも広がっていくような、そんな朝だった。

北西壁へ

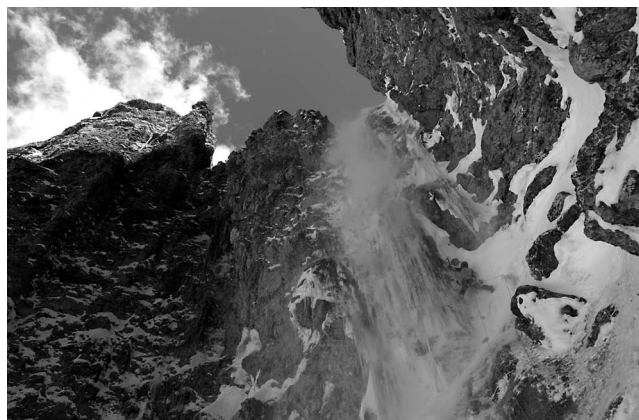
天候を待つために8日間も使ってしまい、残された予備日はもうない。ベースキャンプの食料も残り1泊分だけになり、いよいよ出発する時がやってきた。これが最初で最後のアタックチャンスとなる。

「行って来ます」と言う相手がいないのは少しさみしいものだが、装備をそれぞれ分担し北西壁へと向かった。

2日前に降った雪の影響で積雪は高度を上げるにつれ深くなっていき、久々に動かす身体には堪える。順化が少なかった影響か、長い間ベースキャンプに滞在していた影響か、僕の身体は思うように動かない。平出が作るトレースを追うだけで正直必死だった。C1は壁の取り付きに設営した。上空は風が強く、吹き下ろすスノーシャワーが近寄りがたい雰囲気



まだ核心部は見えない。この時はとにかく先に進むという気持ちでいっぱいだった。



全容を現した核心部。

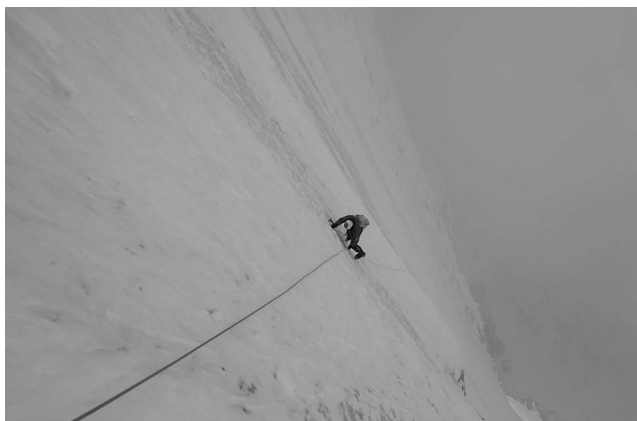
漂わせていた。

翌日、いよいよ本格的なクライミングが始まる。はじめの氷雪壁はコンテでスピードを稼ぎ、危険な箇所はビレイをしながら進む。上部からのスノーシャワーを避けながら、徐々に核心部のガリーへと迫る。出発から約5時間、ようやくガリーの基部に到着。岩のラインで何とか行けるかと思っていたが、予想以上に傾斜が強く、脆そうだ。逆に砂利混じりの薄氷の方がまだプロテクションが取れるかもしれない。氷のラインから取り付くことにした。出だしから垂直の硬い氷。それでもなんとか中間支点が取れ一安心は出来たのだが、ねじ込んだスクリュースがすぐに岩や小石を噛む。いい感じはしない。午後に入って北西壁の上部の氷雪壁にも陽が当たってきたようで、スノーシャワーがたびたび襲ってくる。傾斜は90度。ダイレクトには吹っ飛ばされないものの、腕はパンプし続けながらも必死に耐えていた。

格闘すること2時間、何とか2ピッチで滝の落ち口に出た。北西の壁にようやく陽が差し込んで、一気に体温が蘇ってくる。温められた雪の影響でスノーシャワーは激しくなってきたが、完全に陽が当たる前に登り切ることが出来て助かった。あとはルンゼを詰めるとると小さなリッジに出た。時計は15時を回っており、これ以外上がってもテントを張れそうな場所は見つからないため整地に入る。リッジを削れど、砂利混じりの氷で一向に作業ははかどらない。ピックを痛めつけながら1時間かけてテントの半分が張れそうなテラスが出来上がった。スクリュースでテントを固定したが、崖側をあてがわれた僕は底が浮いていると思うといい心地ではない。この日から食料は一人前を半分にする。アルファ米だとスプーン4すくい程で食べ切ってしまう量だ。グウグウなるお腹は正直で、食欲があるのは元気な証だと言い聞かせながら外に出ると、山頂は赤く染まってい

る。翌日の登頂を祈って寝返りの打てないシュラフに潜った。

翌朝は珍しく高曇りで、絶好の登頂日和とはならない雰囲気だった。いきなり硬い冰雪壁からスタートする。スクリュウで中間支点を取りながらコンテで進もうとするも、ブルーアイスが出てきたのでスタカットを交えながら登り続ける。頂上稜線までのルートは明瞭だ。しかし、あまりにも広大な斜面で頂上稜線までの距離感が掴めない。朝日が差し込む時間になっても、暖かい日差しはここには届かない。いつの間にかあたりはガスに包まれ、ホワイトアウトになっている。風がほとんどないのは有り難いが、視界が効かないのは厄介だ。ガスの切れ間からルートを探るが、一向に近づかない頂上稜線に、ふくらはぎと太腿が悲鳴をあげてきた。



視界が悪いなか、永遠と続く氷壁を登る。

「頂上稜線が見えたね」

この視界で見える範囲に頂上稜線があるとは思ってもいなかった。平出の錯覚か？と思ったら、自分の現在地が更新されていないだけだった。何度も同じ登攀の繰り返しの中、リードしてフォローが登ってくる間に度々うたた寝している。ホワイトアウトの中にいたせいで夢と現実が入り混じった時間を過ごしていた。僕は現在地を見失いかけていたのだ。

7時間かけてようやく頂上稜線に出る。だが、そ

の先もただ歩けば良いだけではなかった。東側に雪庇が張り出し、バッサリ切れ落ちた先には急峻なヒマラヤヒダが続いている。視界は相変わらず悪く、雪質もサラサラでラッセルに苦勞する。単なる雪壁も、この雪質では足元が定まらない。2箇所の急雪壁を越え、まだかまだかとラッセルをしていたら、急に稜線が二つに分かれ長い下りに転じていた。14時50分、ついに頂上に出た。視界は一切ないものの、これで下れると思うと一安心した。日本への登頂連絡や記念撮影を済まし早々に下山を開始する。夕暮れが迫っているので、のんびりしてはいられない。長居は禁物だ。稜線の下りではスノーバーで懸垂下降をして、冰雪壁ではアバラコフで50mの懸垂下降を21回繰り返す。最後はヘッドランプでの行動となったが、スノーシャワーで半分埋もれたテントをなんとか見つけることが出来た。寝床は出発前よりもさらに狭いスペースになってはしまったが、横になれるだけありがたい。疲れ果てても、間違いなく充実した気分だった。

翌日は7:30に出発。相変わらず空は高曇りだが、今日はガリーの下降なのでむしろありがたい。テント場からアバラコフで懸垂下降を開始して、そのまま繰り返す、ガリーの取り付けまで下る。曇っているおかげでスノーシャワーも無く、静かなものだった。あとはクライムダウンと懸垂下降を繰り返し11時C1に到着。ここまで来ると安全地帯でひと息つく。緊張が一気に緩んだこととデボした荷物が増えたことで、足取りは急に重く感じた。歩き慣れた氷河が、いつもより長く感じる。15時過ぎにようやくBCに到着。二人で固い握手を交し、それぞれの想いを抱いたカーンコー登山は無事に終わった。

今回の北西壁は山頂へダイレクトに突き上げた美しいラインであった。取り付くまで隠れて見えて

3. 海外登山記録

いなかった核心部の垂直ガリーもなんとかつながっていたので、完登することが出来た。何十年もの間、眠っていたこの山に、いいスタイルで登れたことは純粋に嬉しい。そして、この山を見つけてきた平出はさすがだ。パキスタンには、このように初登頂だけされて以降登られていない山や、知られていない山はまだ沢山ある。それをどうやってを見つけるかが、登山の楽しみの一つでもある。

次なる山へ出会う旅がまた始まった。

Karun Koh (6,977m)

North West Face (1,800m, AI5)

8月27日 出国

9月3～5日 キャラバン

9月6～10日 順応・偵察

9月11～18日 天候待ち

9月19日 BC(4,200m)→C1(5,200m)

9月20日 C1→C2(6,200m)

9月21日 C2→山頂(6,977m)→C2

9月22日 C2→BC

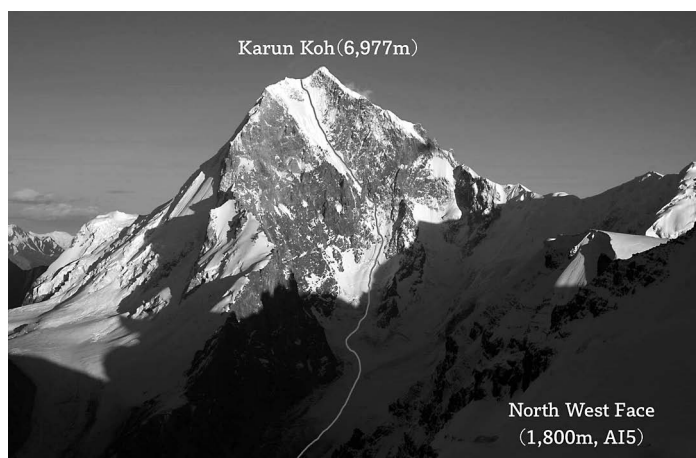
9月23～24日 バックキャラバン

10月6日 帰国

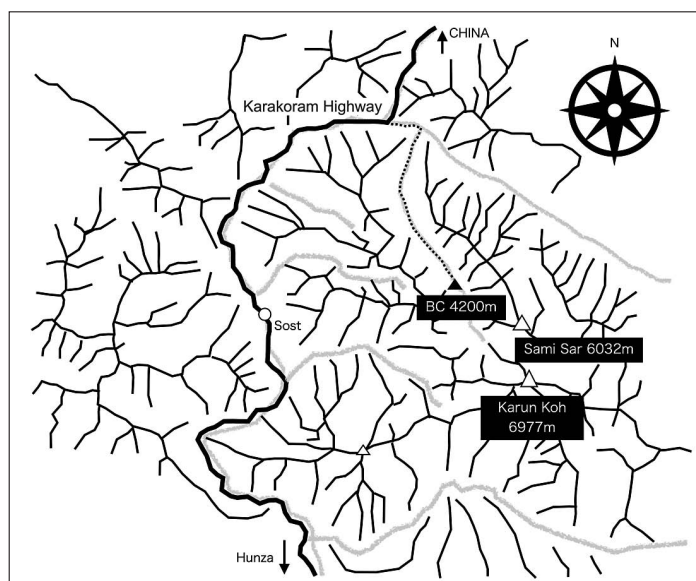
アタック装備

ロープ7.1mm×2、スクリュウ9、ハーケン2、トライカム3、ナッツ3、スノーバー1、アルパインヌンチャク9、120cmスリング4、捨て縄5m、テント1～2人用、ジェットボイル、ガスカートリッジ2、食料3泊分

資料提供：石井スポーツ



Karun Koh New Route



Karun Koh Map



装備一式



登頂するもガスで展望はなかった。この後急いで下山を開始した。